

簾

古名

簾梅

世阿弥作

前

ワキ

西国  
の僧

シテ

里人

後

ワキ

前に  
同じ

シテ

梶原  
景季

地は

摂津

季は

二月

「春を心のしるべにて。く。憂からぬ旅に出でうよ。

詞

「是は西國方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候ふ程に。此度都に上り洛陽一見と心ざし候。

道行「旅心。筑紫の海の船出して。く。八重の潮路を

遙々と。分けこし方の雲の波。煙も見えし松原の。里の名間へば須磨の浦。生田の河に着きにけり。く。

「来る年の矢の生田川。流れて早き月日かな。

「飛花落葉の無常は又。常住不滅の榮をなし。一色一香の艶情は。無非中道の眼に応ず。人間個々艶情の觀念。なほ以て至り難し。あら定めなの身命やな。

「人間有為の転変は。眼子の内に顕はれて。

「閻浮に帰る妄執の。く。其生死の海なれや。生田の川の幾世まで。夢の巷に迷ふらん。よしとて

も身の行くへ。定めありとても終には。夢の直路に帰らん。く。

「如何に申すべき事の候。是なる梅は名木にて候ふか。

シテ「さん候是は簞の梅と申し候。

ワキ「あらおもしろや簞の梅とは。いつの代よりの名木にて候ふぞ。

シテ「いや名木程の事は候はねども。唯私に申しならは

したる異名にて候。

ワキ「よしく私に名づけたる異名なりとも。委しく御物語り候へ。

シテ「そもそも此生田の森は。平家十万余騎の追手なりしに。源氏の方に梶原平三景時。同じき源太景季。色ことなる梅花の有りしを。一枝折つて簞にさす。此花すなはち笠印となりて。氣色あらはに著く。功名人に勝れしかば。景季かへつて此花を礼し。

すなはち八幡の神木と敬せしより以来。名将の古跡の花なればとて。簾の梅とは申すなり。

ワキ「實にや名将の古跡と云ひ名木と云ひ。名残尽きせぬ年々に。

シテ詞「降るは程なき春雨の。古きに帰る名を聞けば。

ワキ「其景季の盛りなりし。

シテ「若木の花の白真弓。

ワキ「簾の梅の。

シテ「今までも。

地クリ「名を留めし。主は花の景季の。く。末の世かけて生田川の。身を捨てゝこそ。名は久しけれ武士の。やたけ心の花に引く。弓筆の名こそ妙なれや。弓筆の名こそ妙なれ。

「さる程に平家は去年播磨の室山。備中の水島二箇度の合戦に打ち勝つて。山陽道南海道。合はせて十四箇国の兵。都合十万余騎。津の国一の谷にぞ

籠りける。

シテサシ

「東は生田の森。西は一の谷を限つて。其間三里が程は満ちくたり。

地 「浦々には数千艘の船を浮べ。陸には赤旗いくらも立てならべ。春風に靡き天に翻る有様。猛火雲を焼くかと見えたり。

シテ 「総じて此城の前は海後は山。

地 「左は須磨右は明石の。とよりかくより行きかふ舟

の。共音の千鳥も声々なり。

クセ

「時しも如月。上旬の空の事なれば。須磨の若木の桜も。まだ咲きかぬる薄雪の。さえかへる波こゝもとに。生田のおのづから盛りを得て。かつ色見する梅が枝。一花開けては天下の春よと。軍の門出を祝ふ。心の花もさきかけぬ。さる程に味方の勢。六万余騎を二手に分けて。範頼義経の追手搦手の。海山かけて須磨の浦。四方を囲みて押し寄

する。

シテ 「魚鱗鶴翼もかくばかり。

地 「後の山松にむれるるは。 残りの雪の白妙に。 ねぐらを立たん真鶴の。 翅を連ぬる其氣色。 雲にたぐへて夥し。 浦には海人様々の。 漁父の船影数見え。て。 漁たく火もかげろふや。 嵐も波も須磨の浦。野にも山にも漕ぎ寄する。 兵船はさながら。 天の鳥船もかくやらん。

ロング地 「はや夕ばえの梅の花。 月になり行く仮枕。 一夜の宿を借し給へ。

シテ 「私は宿りも白雪の。 花の主と思し召さば。 下臥に待ち給へ。

地 「花の主と思へとは。 御身如何なる人やらん。

シテ 「今は何をか包むべき。 我は此世に亡き影の。

地 「跡弔はれんと夕草の。

シテ 「其景季が幽靈なり。

地

「御身他生の縁ありて。一樹の陰の花の縁に。鶯宿  
梅の木の本に。宿らせ給へ我は又。世を鶯のねぐ  
らは。此花よとて失せにけり。此花よとてぞ失せ  
にける。(中入)

ワキ歌  
「うば玉の。夜の衣を返しつゝ。く。更け行くまゝ  
に生田川。水音も澄む夜もすがら。花の木陰に臥  
しにけり。く。

後ジテ

「魂は陽に帰り魄は陰に残る。執心却来の修羅の妾

執。去つて生田の名にしおへり。

地

「血は涿鹿の河となり。

シテ

「紅波楯を流しつゝ。

地  
「白刃骨を碎く苦しみ。月をも日をも手に取る影か  
や。長夜のやみくと眼もくらみ。心も乱るゝ修  
羅道の苦しみ。御覽ぜよ。

ワキ  
「不思議やな其さまいまだ若武者の。胡籠に梅花の  
枝をさし。さも花やかに見え給ふは。如何なる人

シテ  
にてましますぞ。

「今は何をか包むべき。是は源太景季。他生の縁の一樹の陰に。夢中の対面向顔をなす。御身貴き人なれば。法味を得んと魄靈の。魂に移りて來りたり。跡弔ひ給へといはんとすれば。又嗔恚の敵の攻め。あれ御覽ぜよ御聖。

ワキ  
シテ  
「実にく見れば恐ろしや。剣は雨と降りかゝつて。  
シテ  
「天地をかへす如くにて。

ワキ  
「山も震動。

シテ  
「海も鳴り。

ワキ  
「雷火も乱れ。

シテ  
「悪風の。

地  
シテ  
「紅焰の旗を靡かし。紅焰の旗を靡かして。闇浮に  
帰る生田川の。波を立て水を返し。山里海川も。皆修羅道の巷となりぬ。こは如何にあさましや。  
シテ  
「暫く心を静めて見れば。

地

「心を静めて見れば。所は生田なりけり。時も昔の

春の。梅の花盛りなり。一枝手折りて簾にさせば。

もとよりみやびたる若武者に。相逢ふ若木の花鬘。

懸くれば簾の花も源太も。我さきかけんさきかけ

んとの。心の花も梅も。散りかゝつて面白や。敵

の兵之を見て。あつぱれ敵よ逃がすなとて。八騎

が中に取り籠めらるれば。

シテ

「兜も打ち落されて。

地

「大童の姿となつて。

シテ

「郎等三騎に後を合はせ。

地

「向ふ者をば。

シテ

「拝み打ち。

地

「又廻り逢へば。

シテ

「車切。

地

「蜘蛛手かく縄十文字。鶴翼飛行の秘術を尽すと。

見えつる内に夢覚めて。しらくと夜も明くれば。

是までなりや旅人よ。暇申して花は根に。鳥は古  
巣に帰る夢の。鳥は古巣に帰るなり。よくく  
ひて給び給へ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第六輯』大和田建樹著